

図書館員の四季

青空書房と坂本健一さんのこと

市立東大阪医療センター 尾曲 久美子

その古書店は、天神橋筋から枝分かれした商店街の中ほどにあった。

筒井康隆さんや山本一力さんなど著名な作家のエッセイで取り上げられて、すでにお店は全国で知られていた。店主である坂本のおっちゃんも、50年以上お店を続けている長老だった。対するこちらはその日暮らしのフリーターである。

最初にお店に入った時は地元のフリーパーを手にとって平静を装いつつ「これ1冊頂いていいですか?」と尋ねるのが精一杯だった。意外にもおっちゃんはにっこり笑って「ええよ」と応じてくれ、救われた思いがした。

フリーター生活の間、何かにつけてお店に足を運んだ。おっちゃんはこちらが本を1冊選ぶと「それを読むならこれも」と最低でも5冊はカウンターに積んだ。そして地面に置いた1粒の種が目前で1本の木に育つような勢いで、

読書についていろいろな話をしてくれた。こちらは司書資格を取るためのレポートにおっちゃんのことを書き、お店に関する新聞記事を引用文献として挙げた。

仕事が決まってからは天神橋筋あたりに出る機会が減った。定休日に店頭には貼られるおっちゃん直筆のポスターを話題としたテレビ番組を録画して観た。次にお店に行ったら司書として働いていることを伝えようと思っていた。

……訃報は新聞記事になった。店舗兼自宅のベッドに横たわり、本に囲まれて息を引き取られたとのことだった。記事を読み、望んでいた司書の職を得たのと引き換えに失ったものがあるのを痛感した。

こちらの手元には、ずいぶん前に譲り受けた筒井康隆さんのサイン本が宿題のように残されている。ページの間でおっちゃんがにっこり笑って「読みや」と言っているような気がする。



司書資格取得のための科目「児童サービス論」の単位を取るのに難渋した記憶が新しかった頃、お店で左の1冊を見つけて買った。何週間か後にまたお店へ行くと、おっちゃんは右の1冊をカウンターに取り置きしてくれていた。

合掌



「宿題」。1975年発行『やつあたり文化論』。

おまがり くみこ